

DVDの操作説明

メインメニュー



アイヌのお話アニメ

オレシペスウoppo

6

さるがわのおはなし

六つ首の化け物

- イワンレクトゥッペ -

からふとのおはなし

この木たおれろ

- タン ニー ホラハ -

あさひかわのおはなし

カラスの会話

- バシクル ウコイタク -

からふとのこもりうた

おててもものばしなあ あんよものばしなあ

- テヘキ ナートゥーバ ケマハカ ナートゥーバ -

A

ぜんぶみる

順番にすべて再生されます。

B

各タイトルのボタン

それぞれのタイトルが再生されます。

C

音声・字幕切り替え

〈音声〉1.アイヌ語 2.日本語
 〈字幕〉1.日本語 2.アイヌ語(カタカナ)
 3.アイヌ語(ローマ字) 4.なし
 初期設定では「アイヌ語音声・日本語字幕」です。日本語音声のみで再生したいときは音声・字幕設定画面で「日本語音声・字幕なし」を選択して下さい。

D

収録特典 お話まめちしき



各タイトルの豆知識、解説がご覧頂けます。

E

口承文芸視聴覚資料作成事業について

このアニメの目的など、本事業についての説明です。





六つ首の化け物

～イワンレクトゥシベ～



◆カムユカラ(神謡)というジャンル

アイヌ民族の物語文学のひとつ。

主にカムイ(動物や植物、火や水、天候、道具など、人間の生活に不可欠なもの、人間の力が及ばないもののひとつひとつがカムイで、多く神と訳される)が主人公となって、自らの体験を語る内容のものが多い。カムユカラという呼び方は主に北海道の胆振や日高西部で用いられ、ほかの地域ではオイナ(北海道東北部～樺太)、トゥイタク(日高東部)と呼ばれる。主に女性が語るため、「女のユカラ」という意味のメノコユカラ、マツユカラと呼ぶ地域もある。

韻文形式で語られる物語で、短いメロディーにのせて、サケヘ(あるいはサハ)とよばれる繰り返しの文句を挟みこみながら語る。サケヘは、物語の主人公となるカムイたちの鳴き声や姿、性質や特徴などに由来すると考えられているが、意味がよく分からないものも多い。

◆本作品の原資料について

平取町出身の女性が語ったカムユカラ(神謡)である。同資料は、平取町教育委員会によって1969(昭和44)年2月18～19日に記録されたもので、平取町立二風谷アイヌ文化博物館に収蔵されている。

同資料は、「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究

事業(北海道沙流郡平取町)』(2015年、国立大学法人千葉大学)に全文が掲載されている。音声ならびにテキスト・対訳は、上記博物館ホームページ上でも公開されている(テキストNo.17-8)。

また、この物語は同じ語り手によるものがほかにも公刊されている。ひとつは上記報告書に掲載されている(テキストNo.17-10)。もうひとつは萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成 第3巻 カムユカラ編Ⅲ』(1998年、平凡社)に掲載されている。ともに本作とは異なった言い回しや人称を用いており、興味深い資料である。また、久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(1977年、岩波書店)などに別の語り手による類話がある(神謡4・神謡5)。アニメ化にあたっては先述のテキストNo.17-8をもとに、アイヌ語本文を編集委員が作成した。本作の口演は、平取町出身の山道ヒビキ氏が行なった。

◆アニメ化にあたって

自叙者について、物語のなかで明言はされていない。原資料の日本語解説のなかでも語り手自身は「わからない」と答えている。そのため、久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(1977年、岩波書店)所収の類話を参考にし、女神として描いた。また、栗や臼も神の世界では、人の姿をしているとされるが、本作ではキャラクターの描き分けのため、人の姿と栗や臼など、それぞれの姿を折衷したデザインとした。



この木たおれろ

～ タン ニー ホラハ～



◆トウイタハ（散文説話）というジャンル

トウイタハはアイヌ民族の物語文学のひとつで、樺太(サハリン)において散文形式で語られる昔話を指し、作中に短い歌謡が挿入されることが多い。この歌謡は明確な形式のあるものから鳴き声や擬態語のようなものまで作品によってまちまちである。本作のなかでも、じいさんと娘が木の倒れる向きを祈る場面や、じいさんが川に流される場面で節のついた短い歌謡が挿入されている。トウイタハは主に人間を主人公として、ときに動物や化け物なども登場しながら話が展開する。

ほかに散文形式のものとしてはウチャシコマがあり、こちらは伝説や事物の由来を題材としている(本シリーズ3を参照)。

◆本作品の原資料について

本作は、樺太(サハリン)西海岸の真岡出身の女性が、北海道へ移住した後、に語ったトウイタハにもとづいている。原資料の音声は日本放送協会札幌放送局が企画した「アイヌ伝統音楽収集整備計画」にもとづく総合的な調査のなかで、1962(昭和37)年7月にオホーツク沿岸の常呂町で採録された。また、更科源蔵『コタン探訪帳』(弟子屈町立図書館所蔵)には、上記の語り手から聞

き取ったとみられる日本語のあらすじが記録されている。アニメ化にあたっては、原資料の音声にもとづきテキストを作成し、和訳にあたっては『コタン探訪帳』を参照した。本作の口演は椎名庵氏が行なった。

◆アニメ化にあたって

和訳にあたっては、本作のもつ小気味よい語りの雰囲気をも日本語でも伝えるために、文脈を変えない程度に意識した。アイヌ語のなかのタポロ(斧)、ベシカ(伝ってくる)といった単語は、ほかに類例があまりない。そのため、先述の『コタン探訪帳』にある日本語あらすじを参考に、それぞれの日本語をあてた。ラムラム(惚れこむ)という単語も類例が見あたらないが、前後関係から意味を推測した。

作画にあたっては20世紀初頭頃の記録や写真などを参照し、伝承された地域である樺太西海岸の風俗や情景を描いた。



カラスの会話

～ バックル ウコイタク ～



◆トウイタク(散文説話)というジャンル

アイヌ民族の物語文学のひとつ。散文の形で語られる物語である。数分で終わるものや1時間以上に及ぶものもある。抑揚をつけた口調で語る人もいれば、平坦な口調で語る人もいる。北海道北部・東部ではトウイタクと呼ばれるが、北海道南西部ではウエペケレ、樺太(サハリン)ではトウイタハなどと呼ばれる。

人間が主人公となる話、カムイ(神)が主人公となる話などがあり、主人公は多種多様である。内容も多種多様であるが、主人公の生い立ちや家庭環境などの描写に始まり、主題となる事件や事故を経て、教訓を子孫たちに語り残すところで終わるという展開がよくみられる。本作も、そのような展開となっている。

◆本作品の原資料について

本作は、旭川市近文に暮らしていた女性が語ったトウイタクを原資料としている。『市立旭川郷土博物館研究報告 第14号』(1983年、市立旭川郷土博物館)所収の「木原の主の怒り」にもとづき、改題と若干の加除修正を行なってテキストを作成した。なお、同報告書には録音資料がある旨が書かれているが、所在は確認できなかった。

同じ語り手による「病気の村長を救い裕福になった貧しい夫婦の物語」

(『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ9』(1996年、北海道教育庁生涯学習部文化課)所収)というトウイタクがある。物語の終わり方に違いはあるものの、大まかなあらすじが一緒であることから、こちらも演出の参考とした。


本作の口演は、旭川市出身の中井貴規氏が行なった。

◆アニメ化にあたって

カラスの会話が、物語の重要な要素であることから改題した。

映像では、オタサム的女性がトウレブ(オオウバユリ)の雌雄を構わず採取するように描いている。これは、山菜などは全て採らずに少し残せという教訓を強調するための演出であり、本来オオウバユリの雄は採らないものである(DVD収録特典「お話まめちしき」参照)。

ケナシ コロ ウナラベについて、「編みかけのサラニブ(袋)を被ったような髪」をした異形の姿だと語られることもあるが、本作では姿についての具体的な描写はない。そこで、木原を守る女神としての側面を押し出したデザインとした。



おててものばしなあ あんよものばしなあ

～ テヘキ ナートゥーパ ケマハカ ナートゥーパ ～



◆イフンケ（子守歌）というジャンル

イフンケはアイヌ民族の口承文芸のひとつ。イフンケという呼び方は樺太(サハリン)から北海道にかけて広く用いられ、ほかにムンケ(樺太西海岸真岡、北見地方など)、イウンケ(日高地方東部、釧路地方など)、イヌンケ(釧路地方)、イヌムケ(釧路地方)、イヨンノッカ(日高地方西部)、イヨンルイカ(日高地方西部、胆振地方など)など様々な呼び方がある。子守歌の歌詞は固定されたものではなく、同じ歌い手でもその時々で歌詞が異なることがある。また、しばしば物語のような構成をもつものもある(本シリーズ1および2を参照)。

◆本作品の原資料について

樺太(サハリン)西海岸恵須取出身の女性が、北海道へ移住した後に歌ったものにもとづく。本作の資料は、ふたつ残されており、ひとつは日本放送協会札幌放送局による企画「アイヌ伝統音楽収集整備計画」にもとづく総合的な調査のなかで、1962(昭和37)年7月にオホーツク沿岸の常呂町で録音されたもの。いまひとつは、1970(昭和45)年に国立劇場で行われた第11回民俗芸能公演に出演するため上京した際に録音されたもので、こちらはトンコリの伴奏で歌われている(日本伝統文化振興財団制作のCD『アイヌ・北方民族の芸

能』に収録)。

制作に当たっては後者を主としつつ、前者から歌詞を補って構成した。トンコリ演奏については千葉伸彦氏の研究を参照した。口演は川上容子氏、トンコリ演奏は椎名庵氏が行なった。

◆アニメ化にあたって

本作は戦後に歌われたものではあるが、歌い手が生活の中でこの歌を聞き覚えたのは1910年代～1940年代だと思われる。そこで、作画にあたっては20世紀初頭頃の写真などを参照し、在来の文化と外来の要素が混在した当時の生活を描くことにした。

タイトルにあるトゥーパはトゥルパ(turupa)にあたると思われるが、繰り返しはっきりとこう発音しているため、そのまま表記することにした。テヘキ(手)、ケマハカ(足)、チェヘチェ(魚)といった単語は、他に類例があまりない。それぞれテヘ(手)、ケマ(足)、チェヘ(魚)に当たる幼児語と判断した。コホコ(ねんね)、オチシ(負けん気を持つ)についても類例がないが、前後関係からこのように推測した。